

飲水思源

町長 松岡市郎

葛尾村のチャレンジから学びと

福島県に小さな村葛尾村(かつおむら)がある。2011(平成23)年3月の東日本大震災、原発事故で全村避難指示が出され、2015(同27)年6月に避難地域の全面的解除となった。およそ2年が経過し、帰村率はようやく2割、300人程度だという。

避難前の人口は千600人程度の小さな山あいの村である。こんな小さな村を君の椅子プロジェクト代表の磯田憲一氏などとともに4月中旬に訪問した。仙台空港からレンタカーで、検問を経て2時間半ほどで到着。役場前の川に沿って桜の花が満開で、帰村者を待ちわびるように咲き誇っていた。

葛尾村での放射線量は今でも通常の4倍前後、もちろん国が示す安全基準値には収まって入るのだから、4倍と聞くと不安がよぎる。

親子数代にわたって開拓し守ってきた郷土を離れることを余儀なくされ、居場所を失う気持ちとわかれわれ、居場所を失う表現できるのか。筆舌に尽くすことができない悲しみと苦しみがあつたことと思う。

離村している家屋への通路にはバリケードが置かれ、田畑や屋敷回り

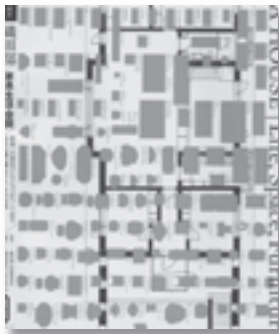
には長く伸びた雑草が立ち枯れ、田には除草のために除去された土が高さ数段にわたって仮置きされシートで覆われている。いつまで仮置きされるのだろうか、何とも痛ましい。村では災害前の常態に戻れることを進めているが、数年も故郷を離れた帰村は新しい開拓にも等しい強い挑戦が必要だと感じる。村の中心部では老若男女が集える居場所の整備も行われている。

さまざまな帰村支援が講じられている中で、先ごろ新たに誕生する赤ちゃんに「君の居場所はここにあるからね」「誕生おめでとう」と村を挙げて祝福する君の椅子プロジェクトの調印式が行われた。既に7人の方が母子手帳を持参していると聞く。磯田代表の君の椅子プロジェクトへの思いを語る講演が開かれ、涙した聴衆者もいた。

「ここが私たちの住んでいた家と村だ」と自分の居場所を誇りと自信をもって語ることが出来る日が近いことを願ってやまない。二度とこのような悲劇が起きないためには、私たちは何をすることが良いのかを考えさせられる一日になった。

織田邸

織田邸出版委員会／著 株式会社ハシモトオフィス／発行所
織田憲嗣という世界的に知られる家具コレクターが北海道に拠点を移しこの住宅を建てた。彼のコレクションの中



ももっとも手元に置きたい家具が高密度に集積した住宅といえる。椅子やソファの置き方だけでなく、クッションや本の置き方等に至るまで、織田さんの生活の流儀が家具のセレクトや配置と一体になって存在している。小さな場の連なりとしての住宅を楽しむことができます。

未来に伝えたい東川 十人十色の美しい風景

写真文化首都 北海道「写真の町」東川町／刊



東川町は1985年に自治体としては全国で初めて「写真の町」宣言を行って以来、写真映りのよい町、人が安心して暮らせる町、訪れる人に癒しを与えまた来なくなる町をめざしています。この作品は、東川町の5人の写真家によって撮られたもので、四季折々の自然とともにある東川町民の暮らしと思い出が彩りも豊かに写し出され、町民の生き生きとした姿を「写真」で語り継いでいます。

東川の本

3月25日で閉館した文化交流館図書室は、今夏開館予定の東川町複合交流施設「せんとぴゅあII」に移転して装い新たに開館します。その間、毎月紹介している新刊図書、DVDの紹介に代わって東川関連の図書をご紹介します。



大雪山の父・小泉秀雄

清水敏一／著 北海道出版企画センター／刊



小泉秀雄は、明治18年山形県に生まれ、中学校の教員を経て25歳の時に博物科の教員として上川中学校(現・旭川東高)に赴任しました。以後大雪山に通い続け、登山と植物採集を行い、独自の調査結果を色々な形で発表しました。大雪山研究のパイオニアとして知られ、小泉岳の命名者でもある、小泉秀雄は大雪山の存在を広く世に知らしめることになりました。